

輝きつゝあるなり。美なるかな花。あさましきかな恋の情。人間人生が事実にして天地が事実にして、人生が希望にして、宇宙が進化して、永遠の命は大事業にして、神の存在神の愛が大事業たる以上は大に吾が命を樂み、人事を樂み、深く觀んことを希ひ、深く思はんことを希ふ也。と、強く希望している。(未完)



村史編さん資料の収集について

——主に高橋玄策のこと——

高 宮 昭 夫

(会員・米水津村浦代)

五月一日付で村史編さん事務局長になったので、この機会に故郷をもっと探究してみたいと思う。

米水津村は県下でも数少ない未合併町村である。未合併町村は私の知る限りでは、前・中・上津江、大山、上浦、姫島と米水津村の七町村しかない。

米水津村は明治二十二年四月町村制が施行され、昭和六十四年三月で百年を迎えることになるが、その記念事業としての村史発行である。昨年より市野瀬仁先生にご足労を願っているが、とにかく大変である。中でも資料の収集に一苦勞する。

私の村に小浦という地区がある。十年も前になろうか、この地区の古老に「あなたが知っている範囲で、小浦で一番古い世話人（区長）の家はどこですか。」と尋ねてある家に行ったことがある。そこで「古文書でもありませんか」と聞いてみたが、何もないと言う。それでもいろいろ尋ねてみると、便所のペーパーに使用しているものがそれらしいという。早速持って来てもらった。見ると前後はかなり破られているが、丹念に墨で書かれた小浦地区の日記である。地区の長として明治二十六年から大正五年頃のものであった。後に小浦地区の老人クラブが、これをもとにして『小浦部落回顧録』として前後二編の小冊子を印刷した。（私が表紙を書いたものをそのまま使用していた。）

以下その一端を紹介する。

明治二十六年、雨乞いをするうち何者かが、大分郡湯の平の奥に行き、池に御酒を供えて雨乞いの心願をかけ祈りなば、必ず雨が降るというを聞き、村中協議の上決定す。ついては行く人を定め……中略……三人は夜に日をつぎ持ち帰り、ほかい（神佛に捧げる）た

れども何の利益もなく、只雨待つの外なしと考えてす
るうち……以下略

その他大漁のこと、村の行事のこと等が細かに記載されている。

もし私が十日早くこの家を探ねていたら、全編が残っていただろう。またもつと遅ければ、この貴重な記録は日の目を見ることなく消失してしまっていただろう。「善は急げ」ということ身をもって体験させられた出来事であった。

そこで話は違うが、私の二十年来の恋人と呼ぶにふさわしい人の事について書きたい。

新聞の日付を見ると、昭和四十年十月一日となっているから、二十年前のことである。今は故人となった羽柴先生から「君の研究を待つ」と手紙に添えて、一枚の新聞の切り抜きを送付して来た。それは米水津村宮野浦出身の高林伝男医師が、ある新聞に寄稿された「松樹軒文庫と高橋玄策のこと」という題の一文であった。

紀元二千六百年記念の大阪市歴史展で、緒方銈次郎氏出品の適塾入門名簿を、大阪城の天守閣で披見する

機会を得た。その時の胸のときめきを忘れることが出来な。その一葉に

豊後佐伯

同年三月七日入門^{注2}

高橋玄策

狂死

中津藩

同年三月九日入門

福沢諭吉

とあった。故郷宮野浦では、高橋玄策のことを、福沢諭吉の兄弟子で適塾の塾頭にまでなったが、尊皇攘夷派の浪士によって暗殺され、井戸に投ぜられたと聞いている。狂死とは政治的な死亡診断かも知れぬと高林先生は結んでいる。

以後、私の玄策の事跡探しが始まったが、今もってさっぱり要領を得ない。

昭和五十年NHKの大河ドラマ「花神」が放映された。大村益次郎（蔵六）とその周辺の人物を描いたものであったが、その時に適塾入門帳の一部が大写しされた。前記の福沢諭吉の頁である。諭吉の右側に高橋玄策の名前が見えるではないか。早速東京のNHKに問い合せてみたが返事はない。ある人に大阪大学で適塾入門者を調査

していると聞き、問い合わせたが不明。大分合同新聞の「灯」欄に広島大学の今永教授が適塾のことを書いているのを見て、今永先生との文通に成功した。先生には此の道の第一人者大阪大学の脇田教授に連絡をとっていた。脇田先生の解答はこうであった。

安政六年九月一日、適塾生名簿には、高橋玄策の名前はないので、安政二年～六年の間に退塾又は死亡したのではないか。また塾頭については安政三年～六年の間は、松下元芳・福沢諭吉・長与専斎がやっています。故に玄策は塾頭をやっていないことになりました。とのことであった。

それで、わらをもつかむ思いで、福沢諭吉研究の第一人者中津市の嶋先生に連絡してみたがわからなかった。

先般、大阪に就職している長女より電話があって「適塾に行ってみたら、適塾入門書に福沢諭吉と高橋玄策の名前があった。」と、さも新しいことを発見したように、声をはずませて言う。家で話したことはない積りなのに、娘も私の恋人の調査に荷担してくれたのが嬉しかった。

先日、本村出身の高年者大学生の一人が、大分大学の尾渡教授（四月退官）が、適塾の話をしていたと知らせ

てくれた。早速手紙を出してお伺いしたら、ご多忙にも
かわらず次のことを知らせて下さった。

適塾は天保九年開塾、天保十五年以降入門者六三七
名、うち大分県関係者二一名でその内訳は、中津一
杵築二 府内二 日出四 国東一 佐伯一である。全
国的にみると青森県のみ入塾者がないので、割合容易
に入塾できたのではなからうか。

ということであった。日田の咸宜園では紹介が必要であ
ったが、ここはどうだったのだろうか。

昭和五十九年十二月九日にテレビで適塾のことが放映
された。それによると全員入学制度で、推せん者は不要
但し入塾料は米六斗、月謝は米一斗五升とあった。推せ
ん者が必要であったとすれば、毛利藩の人であろう。そ
こを糸口でもと考えたが、これも空しいものになってし
まった。

入塾料は今日の約四万五千円となる。貧乏村の出身者
がどのように苦面したものであろうか。月謝の一万円も
大変だったろう。思えば気になる。

これからも続くであろう私の恋人さがついて、史

談会員の諸兄にもし何かのご教示が得られれば、と乞い
願っている次第である。

注1 適塾は適々斎塾の略稱で、適々塾ともいう。

『緒方洪庵伝』 緒方富雄著 岩波書店発
行より

注2 同年とは安政二年のことである。



適塾姓名録の署名